

しよくぎゅう 食牛の気

医療法人 小金井中央病院理事長

田 中 昌 宏

2001年10月、京都市内で開催されたDDWの国際会議場の片隅で木村健教授と若い医局員が談笑している光景が眼に飛び込んできた。歩を進めると教授の視線が私を捕えた。右手を挙上して、「や〜」と声を発する独特のポーズを目の当りにして催眠術に誘われるように私は往時の自治医大消化器内科に一気にタイムスリップをしていた。教授曰く、「最近は大腸内視鏡検査も手掛けている。随分、上手くなったぞ!」と御元気な様子、そして、私には「病院は順調にやっているのか? 息子は卒業したか? 跡取りがいて良かったな」と声を掛けていただいた。教授は、これから東京に戻られる由。京都駅まで御一緒して、久振りに二人きりの昼食になった。料理屋のテーブルを挟んで向かい合う教授の顔貌には昔日の面影がしっかりと刻み込まれていた。柔和な表情のなかにも紙背に徹するような眼光、正鵠を射るような問い掛け、言葉を選ぶときの独特の仕草は昔と変わらず、その偉容には些かの緩みも感じられなかった。束の間のひととき、屋に呑むビールのほろ苦さも手伝って二人は思い出尽きぬ懐古的な世界に遊んでいた。新幹線の時間が迫り、店内の忙しげな人々の流れの中で現実には舞い戻った私は来春の再会を約束し教授の後ろ姿を見送った。

小職が在局していた当時は医局員が少なく、研究、学生教育、診療のすべてに教授が率先垂範して新しい医局の基盤作りに励まれていた。強いリーダーシップは綺羅星の如く我が頭上に輝き、配下の教員達の双眸は常に木村健を仰ぎ見るような時代であったように記憶している。医局員は希望を各々の胸の内に秘め教授に一步でも近づけたらと願っていた。私事で恐縮であるが木村健主任教授と齊藤建教授（当時、自治医大第二病理学）の懇切なる御指導の下、1984年に「クローン病における胃十二指腸病変の内視鏡的および病理学的研究」で学位を授与した。当時のクローン病の概念は小腸大腸を中心とする難病疾患であったが、十二指腸潰瘍患者との遭遇が契機となってクローン病における上部消化管病変に強い関心を抱いたことが此の研究の端緒でした。通算12年に及ぶ上部消化管内視鏡検査と生検病理標本（連続切片60枚作成）の経時的検討の結果、クローン病患者の胃、十二指腸に高頻度にクローン病特有の小病変が存在することを証明しました。最近では消化器病の教科書や厚労省難病診断ガイドラインにもクローン病の胃十二指腸病変の存在は普通に記載されるようになりました。学位取得後、暫くして雑誌「胃と腸」の編集委員会から「クローン病特集号」座談会への出席依頼が舞い込み、教授に報告をすると「これは名誉な招待である、なかなか呼ばれるのは難しい、是非、お受けしろ」と指示されました。後日、座談会司会者から出席者名簿と座談の進め方についての案内が届いた。参加者はクローン病症例の蓄積が豊富な名門大学からの参加が多勢を占め、活発な学会活動に裏打ちされた研究者達でした。その上、司会者は小生が医学生の際、消化器病の講義を担当されていた当時は東北大学第3内科（山形内科）筆頭講師で現在は某私立医大教授の大先輩で

あった。華やかな経歴の面々を向こうにして気持ちは重くなるばかり。自信を失いかけた私は教授に座談会への出席を報告に行き、ついでに、自治医大は新設医大の上、クローン病の患者数も少なく、座談相手は学会の第一人者連なので一抹の不安がある。自治医大消化器内科の恥にならない程度に努力をしますと弱音を吐いたところ、見る見るうちに教授の顔から血の気が引き、両方の眼光は怒気を帯びて酷く睨みつけられた。息の詰まる沈黙の後に「田中君、歳が若いとか所属組織が小さいとか、そんなことは全く関係ない。自治医大消化器内科の代表として出席する機会を得たのだから、悔いの残らぬように堂々とやって来給え」と恐い激励を申し渡される羽目になった。そのときは教授の叱責に動転して分からなかったが、後になって冷静に考えると自分勝手な戦意喪失を吐露しただけではなく主任教授たる木村先生の矜持をも侮辱していたことに気が付いた。不肖37歳の医局員は猛省を促されると共に自身の未熟を深く思い知らされたが、そのお陰で座談会の方は無事に役目を果たし終えた。

当時、愛読の雑誌に「食牛の氣」という短文を見つけた。その意味は世情を騒がしている狂牛病の事か？輸入牛肉を国民の前で食し牛肉の安全性をアピールしている間の抜けた大臣達の笑顔が脳裡を過ぎったが、読んでみて、そのような次元の話ではない事が分かった。曰く、寅の子は生まれ落ちたその時から、自分より大きい牛を食うような激しい気性を持っている。寅は寅としての矜持を生まれ落ちた時から具えているという意味なのだそうだ。教授の叱責は鈍感の身には痛みとして酷く染みだが、何という巡り合わせか？寅の子を見習えとは…。まさに天啓、余りの必然に仰天させられた事を昨日のように覚えている。鋭い洞察力を内に秘めた木村健は医局員の不甲斐なさに憐れみを覚え、気概と自覚を持って生きるよう激励してくれたのだ。師の導きに対し改めて感謝の念を抱かざるを得ない。医局長として教授の傍らに待る時間も長く、スタッフミーティングにおいて口角泡を飛ばして出口の見えない議論を繰り返したことも、頃合いを見計らったような教授の鶴の一声で裁定が下され、暫しの静寂が訪れる。そして、スタッフはその采配に妙に感心をして余韻を楽しんでいた。このような光景を鮮烈に記憶している。懐かしい思い出は枚挙に暇がない、何にも代え難い心の遺産である。

胃と腸

増設号

Crohn 病診療のきつろは

となる症状・所見

出席者（左列順）
 編集 桂君（東北大医学部内科）
 編集 藤野（自治医大消化器内科）
 担当 眞田（自治医大消化器内科）
 編集 原田（自治医大内科）
 編集 松本（自治医大消化器内科）
 編集 山崎（自治医大消化器内科）
 編集 山崎（自治医大消化器内科）
 編集 山崎（自治医大消化器内科）
 編集 山崎（自治医大消化器内科）

編集 山崎（自治医大消化器内科）
 編集 山崎（自治医大消化器内科）
 編集 山崎（自治医大消化器内科）
 編集 山崎（自治医大消化器内科）

大衆（同会）「胃と腸」の Crohn 病診療号は第 12 号（1983 年 7 月 25 日）にありましたが、その Crohn 病診療号は既に廃刊しています。Crohn 病の診療は依然として、難病、予後、難病に悩まされ、患者数も少なく、その一方で、そのために医療従事者が悩んでいることが多いことが分かります。

本誌の編集は、診療のきつろはにちなんで、編集方針としてお話しさせていただきます。本誌編集の中心は Crohn 病診療の専門家、患者、その関係者、その関係者を中心として、また、その関係者を中心としてお話しさせていただきます。



田中 尚 氏

（1983 年 7 月 25 日、第 12 号）